

現職者教員のための調音音声学研修：英語教授法学的見地より

愛知淑徳大学

ジョリー 幸子

I. 目的

2003年2月下旬に、茨城県筑波市で「平成14年度英語教育指導者講座」が開催された。筆者の講義担当科目は英語の音声部門で、主として子音の調音音声学的研修が目的であった。2時間にわたる英語のみを仲介言語として使用しての講義及びワークショップ形式での研修の結果、参加者である中学の部の教員参加数31名、高校の部の教員28名、合計51名の参加による現職者研修の、研修後に収集したアンケートの数値結果、及び記述による感想の報告をしたい。従って当稿の目的は、中学及び高校の英語教師の調音音声学講義に対する過去における知識、経験、そして当日の講義及びワークショップ形式のプレゼンテーションについての感想、及び文章による印象をまとめることにより、将来の同類の英語教育者研修に役立てようと試みるものである。

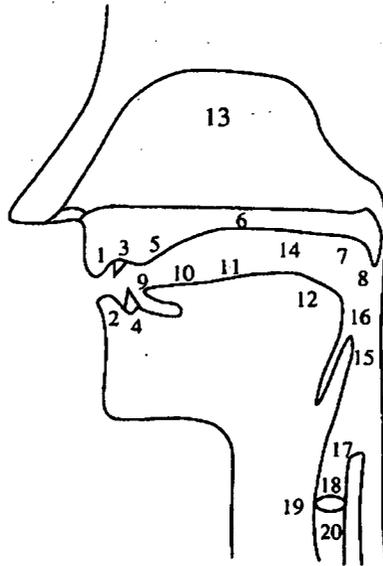
II. 調査方法

上記の英語教育指導者に対する研修内容は、以下の三部より構成される。

まず、第一段階として英語の調音音声学における子音の理論的背景について、人間の頭の縦割り模型図で、音声学者が通常「Sammy」と命名する図表を使用して、音声発音器官の各々の部分の名称、“movable”及び“immovable”部分に関しての口内の仕組みについて解説した(図1参照)。次に各々の子音の調音点(Point of Articulation)と調音法(Manner of Articulation)についての説明を行った(図2参照)。第三段階として、ワークショップ形式で講義内容の各子音の調音音声学的発音法を、参加者が理解しているか否かを再確認するために、「Blank Sammy」上において①両唇、②舌の位置、③口蓋垂、及び④声帯(有声、無声)の四つの部分の動き、又は状態についての(書き込み用の図3参照)記入作業を実施した。以上の作業を含めた合計2時間にわたる研修後の参加者の反応について、彼らの調音音声学に関する印象と記述を原文通りに幾つか抜粋して掲載した。

The Organs of Speech

(調音器官)



1. 上唇	upper lip	13. 鼻腔	nasal cavity
2. 下唇	lower lip	14. 口腔	oral cavity
3. 上歯	upper teeth	15. 喉頭蓋	epiglottis
4. 下歯	lower teeth	16. 咽頭	pharynx
5. 歯茎	alveolar-ridge, tooth ridge	17. 喉頭	larynx
6. 硬口蓋	hard palate	18. 声門	glottis
7. 軟口蓋	soft palate, velum	19. 声帯	vocal cords
8. 口蓋垂(のどひこ)	uvula	20. 気管	windpipe
9. 舌尖	tip (of the tongue)		
10. 前舌	front (of the tongue)		
11. 中舌	middle (of the tongue)		
12. 後舌	back (of the tongue)		

< 図 1 >

出典：アレン玉井光江 横山安紀子 (1993) *English Pronunciation for Better Communication* p. ix

子音分類表

調音点 調音方法	両唇音 Bilabial	唇歯音 Labio-dental	歯音 Inter-dental	歯茎音 Dental, Alveolar	硬口蓋 歯茎音 Palato-Alveolar	硬口蓋音 Palatal	軟口蓋音 Velar	声門音 Glottal
破裂音 (閉鎖音) Stop 無声 有声	p b			t d			k g	
摩擦音 Fricative 無声 有声		f v	θ ð	s z	ʃ ʒ			h
破裂音 Affricate 無声 有声					tʃ dʒ			
鼻音 Nasal	m			n			ŋ	
側音 Lateral				l				
半母音 Semivowel	w			r		j	(w)	

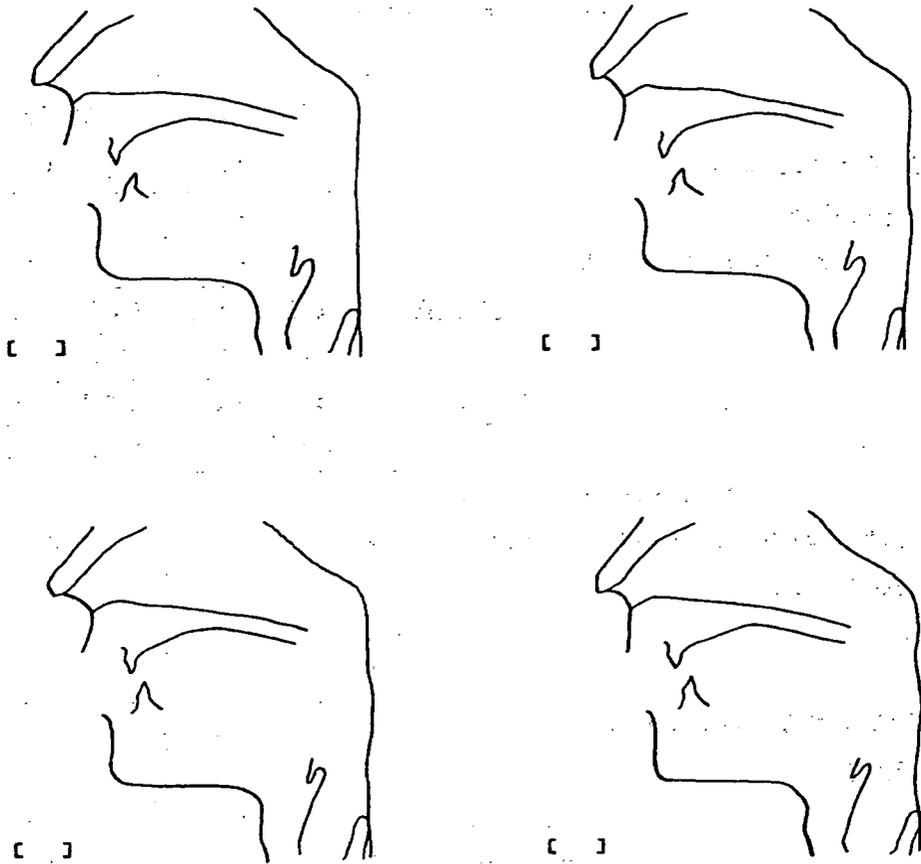
・[r] の場合、発音の環境によって摩擦音に分類されることもある。

・この他にみられる表記に次のようなものがある。

ʃ=j ʒ=ʒ y=j ɧ=tʃ j=dʒ

< 図 2 >

出典：アレン玉井光江・横山安紀子 (1993) *English Pronunciation for Better Communication* p. xii



< 図 3 >

出典： William A. Smalley (1962) *Manual of Articulatory Phonetics* p.21

アンケートの質問に関する内容の第一部門は当研修時点までの調音音声学の知識について、参加者の背景を尋ねるものである。第二部門は(1)当日のプレゼンテーションについて参加者の理解度、(2)言語学的知識への応用の可能性、(3)教育現場への応用の可能性、(4)生徒の語学力に寄与する可能性、(5)英語の教師の基礎知識、技能として他の教師にも、今日のプレゼンテーションとワークショップを推薦するか否かを、5項目にわたって尋ねた。第三部門では当日のプレゼンテーションの中で、何が役に立ったかを英語で問うものである。そして、第四部門では自由記述による参加者の当日の印象や感想、希望などを尋ねたものである。無記名式なので、率直な意見を述べて欲しい旨を講師(調査者)が付け加えたが、中には回答者の本人名を記入し、今後の教育現場に関しての助言、アドバイスや講師からの直接の連絡を求める参加者もいて、その熱心な教育姿勢には心打たれるものが感じ取られた。

平成 14 年度英語教育指導者講座

		中学の部 合計 31 人中		高校の部 合計 28 人中	
I. 調音音声学の知識について					
1. 今日が初めて		5 人		8 人	
2. 大学／大学院でコースとして習得した		21 人		18 人	
使用言語	日本語	英語	日本語	英語	
	15 人	7 人	13 人	8 人	
教授	日本人	NES ※	日本人	NES	
	20 人	1 人	17 人	3 人	
※ Native English Speaker					
3. 講演／講習／プレゼンテーションなどで習った		1 人		0 人	
4. 独学で学んだ		3 人		2 人	
5. その他		1 人		0 人	
II. 今日のプレゼンテーションについて					
1. 理解度					
よく分かった		25 人		17 人	
少し分かった		6 人		8 人	
どちらでもない		0 人		1 人	
余り分らなかった		0 人		1 人	
分からなかった		0 人		0 人	
2. 言語学的知識への応用の可能性					
多いにある		16 人		14 人	
少しある		12 人		11 人	
どちらでもない		2 人		0 人	
余りない		0 人		0 人	
ない		0 人		1 人	
3. 教育現場への応用の可能性					
多いにある		19 人		16 人	
少しある		11 人		10 人	
どちらでもない		1 人		0 人	
余りない		0 人		1 人	
ない		0 人		0 人	

4.生徒の語学力に寄与する可能性

多いにある	19人	10人
少しある	11人	16人
どちらでもない	1人	1人
余りない	0人	0人
ない	0人	0人

5.英語教師の基礎知識、技能として他の教師にも

多いに推薦する	22人	15人
少し推薦する	8人	9人
どちらでもない	1人	2人
余り推薦しない	0人	1人
推薦しない	0人	0人

Ⅲ.今日のプレゼンテーションの中で何が役に立ちましたか？

a. Speech Organs on Sammy's face

b. Consonant's chart(Biaxes of Points & Manners of articulation)

c. Hearing the presenter's sounds

d. Drawing on the blank Sammy

e. Looking at the presenter's gestures

f. Other item

中学の部			高校の部		
1番	2番	3番	1番	2番	3番
7人	5人	6人	2人	9人	5人
10人	9人	6人	9人	8人	5人
8人	8人	8人	9人	6人	5人
2人	3人	5人	5人	3人	11人
1人	6人	5人	2人	1人	0人
4人	0人	0人	1人	0人	0人

中学と高校の合計

a. Speech Organs on Sammy's face

b. Consonant's chart(Biaxes of Points & Manners of articulation)

c. Hearing the presenter's sounds

d. Drawing on the blank Sammy

e. Looking at the presenter's gestures

f. Other item

1番	2番	3番
9人	14人	11人
19人	17人	11人
17人	14人	13人
7人	6人	16人
3人	7人	5人
5人	0人	0人

Ⅳ. その他の、何でもお気付きの点を書いて下さい。

1. _____
2. _____

III. 結果

I. 調音音声学について

1. の「今回が初めて」の回答は中学で5人(16%)、高校で8人(29%)、両方の部の合計13人(22%)が初めてと判明した。彼らは教職課程で履修しなかったか、又は教職課程を経ないで現場の英語教育に従事しているということなのか疑問に思う結果となった。

2. 「大学/大学院でコースとして習得した」については中学で21人(68%)、高校で18人(64%)、中学校からの参加者が習得した折の使用言語は日本語であったという回答が15人(48%)、英語であったが7人(25%)であった。高校の部の参加者については使用言語は日本語が13人、英語が8人で、講義は日本語の用語(terminology)で学んだ割合が強いことが判明した。次にそのコースを担当した「教授は日本人であった」が中学の部で20人、「Native English Speaker」が中学の部で1人、高校の部では、日本人が17人で、Native English Speakerが3人であり、圧倒的に日本人の教授から学んだことが判明した。

3.4.5. はそれぞれ数名の応答があり、中学教員の3人が「独学で学んだ」には、その熱意に敬意を表したい。

II. 「今日のプレゼンテーションについて」の回答を以下に分析してみる。

「理解度」に関しては、中学の部では「よく分かった」が25人で約81%を占め、高校の部でも28人中17人で61%となった。次に「少しわかった」が中学の部が6人、高校は8人である。従って両方を合計すると、中学が31名(100%)、高校が25人(89%)で全体平均が95%の結果を示した。

「言語学的知識への応用の可能性」については「多いにある」が中学で16人(52%)、高校で14人(50%)となった。「少しある」は中学で12人(39%)、高校で11人(39%)であった。両方を足すとそれぞれ中学、28人(98%)、高校、25人(89%)という回答を寄せて来た。従って彼らの教師の言語学的知識への応用の可能性は、当該調音音声学のプレゼンテーションに関しては大きな「可能性」があると回答者が認めていると考えてよいと思う。

「教育現場への応用の可能性」の問いについても、中学の19人(61%)、高校の16人(57%)という結果であった。「多いにある」及び、「少しある」を足せば、ほぼ全員になるということが判明し、応用の可能性は高いとみなされていると判断できる。

「生徒の語学力に寄与する可能性」については「多いにある」が中学で19人(61%)、高校で16人(57%)、「少しある」がそれぞれ11人(35%)、10人(36%)であった。高校の部において10人の教師が「少しある」としか回答しなかったということは、音声に関しては、日常のクラスの中で英会話や音声学教育に割く時間が少なく、大学入学試験や模擬試験などの為に読解、文法などの説明、及び模擬試験などに時間を費やしななければならない現実が表れているからかと想像される。

「英語教師の基礎知識、技能として他の教師にも推薦したい」という項目については「多いに推薦する」が中学で22人(71%)。高校では15人(54%)であった。「少し推薦する」がそれぞれ8人(26%)と9人(32%)となった。両方の回答数を加算すれば、ほぼ全員になる

ことがここでも明白になった。従って英語教師の基礎知識として、調音音声学は他の同僚に「推薦する」ということに意見が一致しているとみなしても過言ではないと考えられる。

3. 「今日のプレゼンテーションの中で何が役に立ちましたか？」という質問に対して以下の6項目で尋ねてみた。

- a. Speech Organs on Sammy's face
- b. Consonants' chart (Biaxes of Points & Manners of Articulation)
- c. Hearing the presenter's sounds
- d. Drawing on the blank Sammy
- e. Looking at the presenter's gestures
- f. Other item

これ等の項目に回答した参加者の内、先ず中学の教師の反応は“a. Speech Organs on Sammy's face”（サミーの顔を使つての調音器官）が一番役に立ったという回答は7人、二番目に役に立ったという回答が5人、三番目に役に立ったのは6人という結果になっている。

同じく中学校の教師の回答の結果を見ると“b. Consonants' chart”（調音点と調音法を一覧表にした英語の子音の表）が役に立ったと考えた教師が10人該当し、一番数が多い。その次が“c. Hearing the presenter's sounds”（プレゼンターの発音する音を聞くこと）が役に立ったという回答が8人となっている。同等位の数で二番目に多かったのが、“b. Consonants' chart”が役に立ったというものであった。三番目は分散しているけれども、講師であるプレゼンターの発音する音を聞くことが良かったという項目に8人が回答を寄せている。

次に高校の教師の反応で一番役に立ったという回答は二つあり、“b. Consonants' chart”（9人）及び、“c. Hearing the presenter's sounds”（9人）となっている。二番目に役に立ったという回答は“a. Speech Organs on Sammy's face”（9人）、そして次に“b. Consonants' chart”（8人）と“c. Hearing the presenter's sounds”（6人）の順位である。要約するとやはり一番役に立ったのは、平均して“b. Consonants' chart”及び“c. Hearing the presenter's sounds”という項目であることが判明した。

IV. 「その他の、何でもお気付きの点を書いてください。」という最後の問いに関しては、多種多様の発言、感想が寄せられているのでその代表的なものを幾つか抜粋し、以下に列挙してみる。

< 中学の部より >

- 話せればいい、通じればいい、という考えで授業をする先生が多い中、私は正しい音声学に基いた常識ある英語で学校で生徒に伝える使命があると考え、日頃の授業に音声の知識（作り方、記号の理解など）と実践を続けています。今回の講義により、自分の実践は間違いないと再確認しました。
- 先生の話し方や身振り手振りが理解の助けになりました。先生はご自分で研究されていることを実際の lecture でも実践されているのだなあと感じました。暖かい雰囲気の中で学習できて嬉しかったです。

- やはり、日本語の発声と英語の発声の違いは、細かいところを音声学で学ぶことでしか習得できないことを痛感した。
- ミニマム ペアは中学生にも有効で分かりやすいと思う。ワークシートや例の載っている手に入りやすい書籍を紹介していただけるとありがたい。
- 生徒の発音に関わることが現場でも最近ますます話題になってきています。(昔はあまり重視されていなかったと思います) たとえば恥ずかしい話ですが [dʒ] のことなど私自身今日初めて知りました。[n] sounds のことも。(an egg がアンネグになってしまう理由が今日初めて分かりました。これからは生徒に正しく教えられます。)
- When I was in college, I learned about Articulatory Phonetics. But today I was surprised Japanese “j” sound is different from “dʒ” sound. I’ll try to teach the students about that . I didn’t know that we have three types of “n(s)” in Japanese.

<高校の部より>

- 自分の発音がいつまでたっても容易に改善されなかったのは、音声学の知識の欠如が原因だったとわかりました。音声学の立場から、もっと訓練したいと思います。単語の成り立ち(ラテン語、ギリシャ語起源)の知識があると、単語を容易に推測できることに興味を持ちました。その意味でラテン語を学ぶことは重要だと思います。
- 大学で学んだときよりも興味深くお話を聞くことができました。Speech Organs の表の見方がよくわかり、発音のしくみがはっきりしました。
- 担当講師の発音が美しく洗練されているのに感服しました。授業中のジェスチャー、アイコンタクト等も我々教師にとって参考になりました。
- 今までの断片的な知識から大きく前進できました。次回もこのような内容を期待します。
- When I learned phonetics as a university students, I didn’t like the lectures because they were monotonous . But today’s lecture was full of presentation so I like it very much which was easy to understand! The way of presentation was very sophisticated!
- The difference between [ʒ] and [dʒ] is also my problem. Your explanation and demonstration was quite clear! Thank you

V. 終りに

今回の筑波市における「英語教育指導者講座」における 59 人の中学、高等学校から参加した現場の教師の研修会において、彼等の熱心な聴講姿勢に対して講師としても励まされた思いがする。

今回の参加者は勿論のこと、全国の数多くの英語教育に携わるその他の教師にも、調音音声学の研修の必要性の高いことも再認識した。大学に進学してくる新入生に発音を教える時、やはり基本の英語子音、及び母音の正確な発音法を中、高等学校の授業の中で教育すべきであるという常識が、現実には上級校への受験のため、読解や文法、語彙の暗記等に重点を置いて指導が行われるために、発音や会話には余り時

間が費やされていないことも彼等の記述から判明した。これらの問題も含め、生徒がそして学生達が英語に対する communicative competence 及び performance を会得するために、文部科学省を中心とした国の行政、そして各自治体の管理、指導体制が見直さなければならないことを、当研究を通じて痛感した次第である。